

第4章 自己指導能力の育成に向けた各校種における生徒指導の実践

1 A小学校における実践例

A小学校では、児童理解のために「生徒指導対策委員会（每学期2～3回：校長・教頭・生徒指導主任・各学年代表・養護教諭）」と「子どもを語る会（毎月2回：全職員）」を行っている。また、問題行動の事例や心身の面で早急に特別な支援が必要な場合等は、随時報告し合うようにしている。しかし、これまでは、一部の児童を対象にする消極的な生徒指導であったため、本年度は全児童を対象にする積極的な生徒指導となるよう「学校楽しいーと」を活用しての教育相談等を行うことにした。そこで、ここでは、「学校楽しいーと」の全校実施に至るまでの流れとその分析結果を受けての取組について述べる。

(1) 「学校楽しいーと」の全校実施に至るまで

「学校楽しいーと」の活用については、以下の流れで現在行っている。

平成23年度末に「学校楽しいーと」を全学年（約600名）で活用できるよう平成24年度の教育課程に位置付けた（表9）。

表9 小学校第5学年「学校楽しいーと」活用の年間指導計画

	生活目標	基本的な生活指導	主な行事	学年・全体での活動	「学校楽しいーと」の活用
4月	学校のきまりを守りましょう	気持ちのよい挨拶や返事 生活のしおりの確認 持ち物への記名	・始業式、入学式 ・交通教室 ・いじめ問題を考える週間	職員会議 第1回生徒指導対策委員会 職員研修「生徒指導事例研修」 子どもを語る会（5・6年） 校区内生徒指導巡回	職員会議にて「学校楽しいーと」を活用することの確認 「学校楽しいーと」の内容の説明 「学校楽しいーと」の実施方法の説明
5月	遊びのきまりを守りましょう	安全な遊び方	・授業参観 ・スケッチ大会 ・家庭訪問 ・一日遠足	学級活動 子どもを語る会（4年）	1回目の「学校楽しいーと」の実施（全学年）
6月	安全に気をつけましょう	正しい歩行（廊下・階段）	・日曜参観 ・教育相談（児童対象） 子どもと語ろう会	第2回生徒指導対策委員会 子どもを語る会（3年）	「学校楽しいーと」の結果報告
7月	校内をきれいにしましょう	校外での遊び	・終業式 ・教育相談（保護者）	学級活動 子どもを語る会（1・2年）	2回目の「学校楽しいーと」の実施（2～6年）
8月	計画を立てて楽しい夏休みを過ごそう	夏休みのきまり	・教育相談（保護者） 子どもと語ろう会	校外補導	「学校楽しいーと」実施についてのアンケート
9月	チャイムの合図を守りましょう	集団行動	・始業式 ・芸術鑑賞会 ・いじめ問題を考える週間	子どもを語る会（5・6年） 第3回生徒指導対策委員会 校区内生徒指導巡回	
10月	礼儀正しくしましょう	明るい挨拶と返事・言葉遣い	・秋季大運動会 ・一日遠足 ・修学旅行	学級活動 子どもを語る会（4年） 第4回生徒指導対策委員会	2回目の「学校楽しいーと」の実施（1年）
11月	進んで本を読みましょう	図書館のきまり	・「心の教育の日」参観 ・集団宿泊学習	子どもを語る会（2・3年） 第5回生徒指導対策委員会	
12月	寒くても元気に過ごしましょう	病気に負けない体づくり	・教育相談（保護者）	学級活動 第7回生徒指導対策委員会	3回目の「学校楽しいーと」の実施（全学年）
3月	身の回りの整理整頓をしましょう	使用した物の整理整頓	・授業参観 ・お別れ遠足 ・卒業式、修了式	職員会議 第8回生徒指導対策委員会	「学校楽しいーと」の反省と来年度の確認

(2) 「学校楽しいーと」による児童の実態把握

2回実施した「学校楽しいーと」の学年平均結果は次のとおりである(図15)。

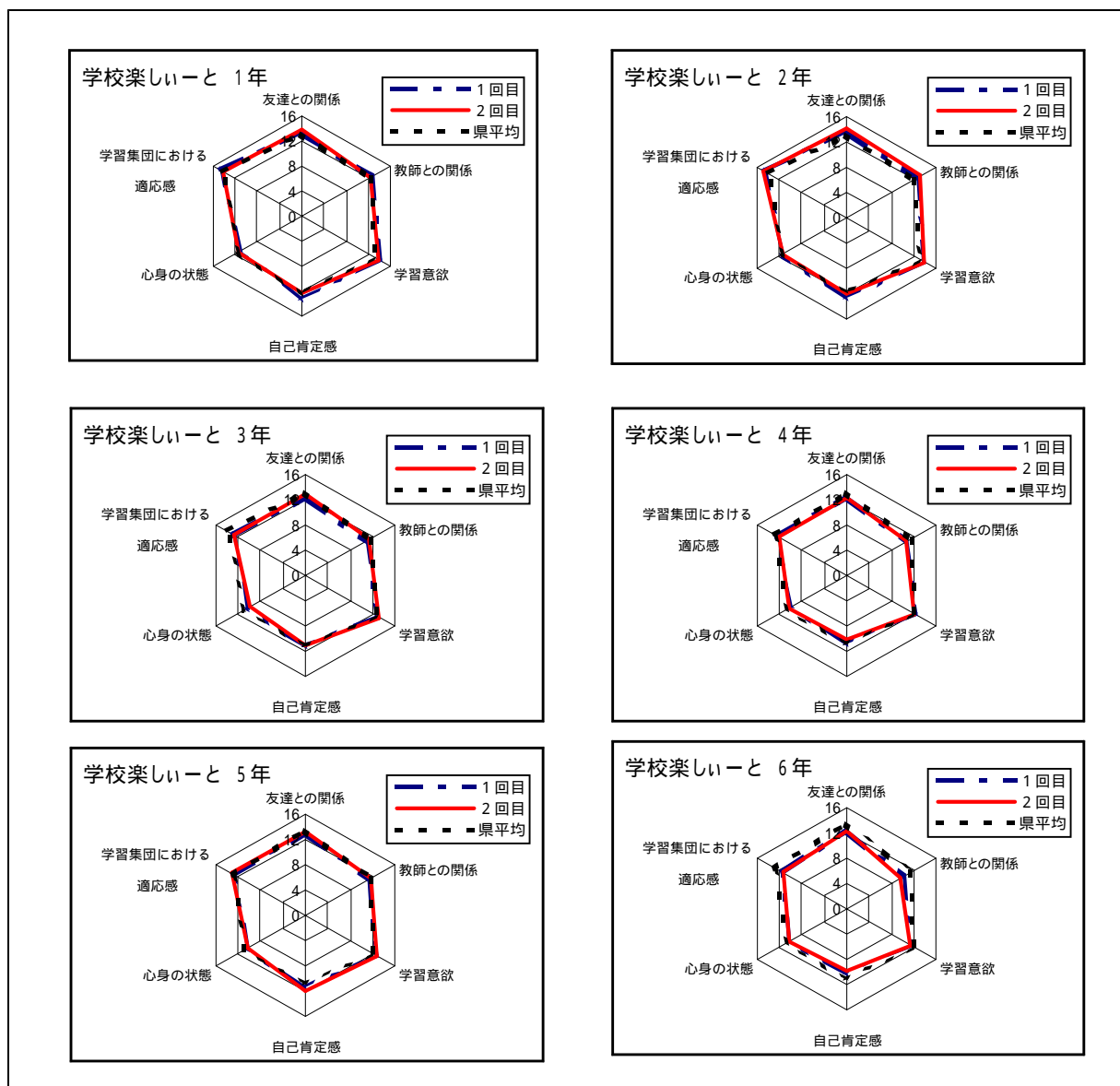


図15 「学校楽しいーと」の学年平均

1回目の結果を受け、学年会で気になる児童の情報交換を行うとともに、学年全体で共通に取り組む内容と、学級の特徴に応じた取組を行うことを話し合い実践した。

(3) 学年会における「教師の関わり方」の気付きからのアプローチ

ア 下学年における取組

「学校楽しいーと」の結果から、児童の「心身の状態」や「自己肯定感」が低いことが気になり、教師の関わり方について改めて話し合った。すると、忘れ物などしつけ面をきちんとできるまでさせようとするあまり「叱る」ことが多くなっていることに気付いた。そのため、「忘れ物」については、声掛けだけではなく、チェック表を作成したり、学級通信で準備する物を詳しく載せたりするなど工夫することにした。その結果、忘れ物なども減少し、「叱る」ことも少なくなってきた。また、帰りの会において自分のよさに気付いたり、賞賛したりする場を意図的に増やした。その結果、他者から賞賛される喜びにより児童の善行も増えてきた。さらに、学級PTAでも認める機会や褒める機会、スキンシップの大切さにつ

いて話題にすることで、学校と家庭が一体となって、児童を認め励ます機会が増えてきた。2回目に実施した「学校楽しいーと」の結果では、「心身の状態」と「自己肯定感」、「教師との関係」も好転した。

(4) 教育相談の充実

A 小学校では次の4点を努力点として、教育相談の充実に努めている。

日常の教育活動のあらゆる機会と場を利用して、いつでも教育相談ができるようにする。学校と家庭との連携を密にして、教育相談の充実に図る。
校長，教頭，生徒指導係，教育相談係，養護教諭，担任等による報告・連絡・相談など連携を密にし，教育相談の充実に図る。
関係機関・団体と連絡を取り合い，連携して教育相談が進められるようにする。

ア 児童対象（子どもと語ろう会）：6月

6月は、日常の観察を通して、随時必要と思われる児童を対象に行う臨時相談ではなく、教育相談月間として、児童を対象に定期相談（子どもと語ろう会）を実施した。1回目の結果を受け、まず現在の状況（不安や悩み等）を把握し、受容的な態度で実施した。

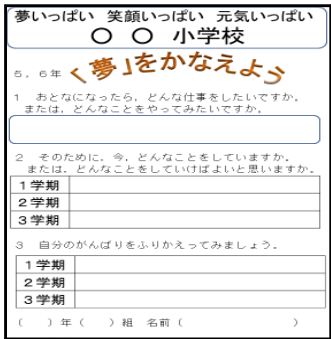
これまでも行っていた児童との教育相談であったが、個票から現在の状況を把握することができたため、児童からの聴き取りだけではなく、担任が見取ってきた児童のよさを認め、自己解決を促す言葉掛けも行うことができた。


イ 保護者対象（子どもを語ろう会）：8月


「学校楽しいーと」を1学期に2回実施（1年生は、10月に2回目を実施）したことで、学校での様子など児童の変容を伝える資料となった。また、夏季休業中に実施したこともあり、夏季休業中の家庭における学習・生活面の目標設定や2学期に向けての共通実践事項を確認することができた。なお、個票は保護者に見せずに教師の手持ち資料として活用した。

(5) 「夢実現にチャレンジ」との連動

これまで夢実現にチャレンジする児童を育成するために、「『夢』は、子どもが成長する大切なエネルギーである」を理念とし、学校と家庭等が連携しながら取り組んできた。しかし、児童は、自分のよさに気付かず、継続して夢を追求する姿があまり見られないという課題があった。「学校楽しいーと」を実施し、自分を見つめる場や機会を数多く設定することで、どの児童も自分の夢や目標に向けて勉強やスポーツなど様々なことに、毎日一生懸命に取り組む姿が見られるようになってきた。また、児童の日記には、自分の努力する姿だけではなく、友達の頑張りへの賞賛や友達のよさを書いたものが増えてきている。







【『夢』をかなえよう」カード】

表面：自分の夢や目標とそれを実現するために努力すること、自己評価（振り返り）
裏面：担任や保護者の励ましなど

【校長室前の廊下に掲示したカード】

自分の夢を見つけて指さしたり、友達の夢に興味深そうに眺めたりして自分の夢や目標を人知ってもらふことにより、実現に向けての自覚や意識が高まってきている。

(6) P T Aとの連携

学校の生活指導上の取組に関しては、学級P T Aや学校便り等を通じて保護者等に対して周知を図り、学校教育に関心をもってもらい協力をいただいている。「学校楽しいーと」の1回目の結果から第2学年以外、「心身の状態」が県平均よりも低いことが分かり、本年度は「学校楽しいーと」の結果と関連付けて次のように取り組んだ。

ア 学級保健目標の設定（P T A保健体育部を中心に）

第1回学校保健委員会で「早寝・早起き・朝ごはん」を中心に学級目標を設定し、取り組むことが確認され、その目標を達成するため各学級では具体的な方策を立て取り組んでいる。

【5年生の取組】 目標：朝ごはんをしっかりと食べよう!! 「一日の始まりは朝ごはん」
生活実態調査（就寝時間、起床時間、テレビ視聴時間、家庭学習時間など）の実施
栄養バランスを考えた朝食の紹介

5学年では「心身の状態」を高めるためには、規則正しい生活習慣を確立させることが大切であると考え、生活実態調査の実施後に目標を設定した。また、道徳の学習や家庭学習（生活実態記入欄）等を基に振り返りを行い、目標の見直しを行っている。

イ いじめの早期発見に向けたアンケートの実施

9月の「いじめ問題を考える週間」に合わせて、保護者を対象に「いじめの早期発見に向けたアンケート」を実施した。家庭でも「いじめ問題」について話題にしてもらうとともに、問題を共有化し、早期発見・解消に努めている。また、アンケートについては学級ごとにまとめ、生徒指導対策委員会で情報を共有するとともに、担任一人で抱え込むことがないように学年等組織で対応している。アンケート回収率は平成23年度：93.5%、平成24年度：97.8%となり、「いじめ問題」に対する保護者の意識も高まってきている。

(7) 成果と課題

ア 成果

学校全体で「学校楽しいーと」を実施したことで、本校の児童の実態を把握し、指導上の問題点や指導方法を共通理解するなど、本校の教育活動全体を振り返る機会となった。

「学校楽しいーと」を実施したことで、児童の日頃の様子だけでは見えない部分も知ることができ、児童一人一人の状況を客観的に理解することができた。また、個別に結果が出るので、個に応じた対応ができた。

「学校楽しいーと」を2回実施したことで、児童の心の状態変化を見ることができ、実態を把握する上で役立った。また、教育相談において、保護者に児童の様子を伝えるための資料となり、効果的であった。

教師自身の生徒指導上の課題、学級経営を見直す機会となり、児童理解の重要性を改めて感じ、具体的な実践を行うことができた。

イ 課題

「学校楽しいーと」は、低学年児童にとっては質問項目が多く、1回目は内容説明に時間がかかった。また、低学年の児童にとって「お腹、頭、気分」が悪くなるという質問は、ただ体調が悪いのか、それとも心の状態が反映しているのか見極めが難しかった。

「友達との関係」、「学級集団における適応感」のポイントが低い児童が安心して学校で過ごせるように、支援の仕方を考えていく必要がある。

今後、回数を重ね、日々児童がどのように変化しているのかを理解し、教師が、それに基づいた具体的な取組をしていく必要がある。

2 B中学校における実践例

B中学校では、比較的落ち着いた学校生活を送っている生徒が多い。しかし、友達関係において、思いやりに欠ける発言からトラブルにつながる事例もあり、生徒が「場に応じた適切な対応の仕方」を身に付けられるように自己指導能力を育成していく必要がある。そのためにも、教師による生徒理解を積極的に進め、その分析結果を踏まえた適切な教師の関わり方を検討していくことが重要であると考えている。

(1) 「学校楽しいと」による検証

今回の調査対象となる2年生(148名)は、平成23年度も当教育センターとの連携により、「学校楽しいと」を実施しており、平成24年度が2年目である。

本実践では、特に、「個に焦点を当てた取組」について、「学校楽しいと」から捉える生徒の変容について、教師との関わり方の観点から検証していく。なお、「学校楽しいと」は、昨年度と同時期の11月に実態調査を行っている。

(2) 個への対応(生徒A:2年)

【生徒Aの概要(1年時の状況)】

生徒Aは明るく、周囲から注目を浴びるのを好む生徒であった。学級集団の中でも非常に存在感があったが、教師にとっては気になる生徒であった。集団の中に埋もれてしまうことを嫌い、場にそぐわない発言や行動をとってしまう回数が増えていくこともあった。また、すぐに感情的になり、教師の指導を素直に聞き入れない状況もあった。

【「学校楽しいと」の結果による生徒Aの変容】

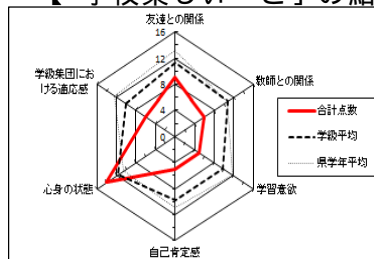


図16 1年時(11月)

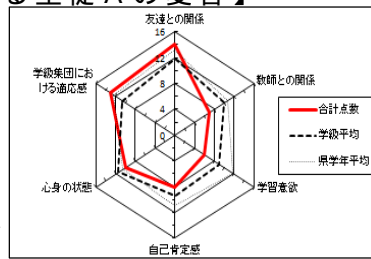


図17 2年時(11月)

表10 生徒Aの6観点の変容

区分	1年	変容	2年
友達との関係	9	↗	14
教師との関係	6	↗	7
学習意欲	5	↗	6
自己肯定感	5	↗	8
心身の状態	14	↘	10
学級適応感	7	↗	13

ア 1年時(11月)の結果の分析

図16のとおり、「心身の状態」以外の観点は全て低いポイントを示していた。特に、「自己肯定感」のポイントが低く、「他人から自分は好かれてはいない。」と生徒Aは受け取っていたことが分かった。また、「学習意欲」も低く、学習の仕方について不安があり、学習に対してあまり自信をもてていないことが分かった。

イ 指導・援助の方針

「自己肯定感」を高め、学級集団の中で、自己存在感をもてるように働き掛ける。

ウ 具体的な働き掛け

4月から新しい学級での生活が始まり、学級担任も代わった。「自己肯定感」のポイントが低いことにより、自己有用感や学級集団の中で存在感をもたせる取組を意図的に行い、学級への所属感を味わわせ、自己肯定感を高めさせることを念頭に置いた関わりを試みた。

時と場に応じた雰囲気づくりを大切にしながらも、様々な場面で生徒と多くの会話を丁寧に行うよう働き掛けた。

様々な場面で生徒Aの出番を与え、見届け、承認し、賞賛する回数を意図的に増やした。

「学級通信」を発行した。生徒同士が互いを認め合うことができ、保護者同士も絆が深まるような内容を吟味し発行を続けている。道徳や学級活動の時間の感想や頑張っていた生徒の賞賛について適宜掲載している。

エ 2年時（11月）の結果の分析

図17、表10のとおり、6観点中5観点においてポイントは高くなっており、特に「学級集団における適応感」の観点については、そのポイントが倍に近い値を示している。生徒Aは、学級内に自分の居場所が確保されつつある状況にある。「自己肯定感」を高めさせることを念頭に置いた様々な取組や「教師の関わり方」が効果を発揮しているものとする。また、生徒Aは、周囲の友達に認められる存在であると同時に、友達から助けられている状況もあり、「友達との関係」も良好な状態である。

しかし、「心身の状態」についてはややポイントが低くなっている。表面上は明るく元気な様子であるが、どこか不安を抱えている可能性がある。日々の会話を大切にしながら、今後も注意深く見守り、生徒Aに自信をもたせるような関わりを継続していく。

(3) 個への対応（生徒B：2年）

【生徒Bの概要（1年時の状況）】

生徒Bは、どちらかというとおとなしく、周りに流されることなく、自分自身の考えをしっかりと持っている生徒であった。特に、問題行動等もなく、友達からの信頼も厚かった。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Bの変容】

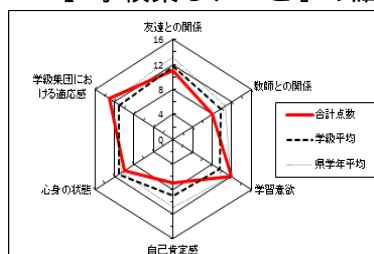


図18 1年時（11月）

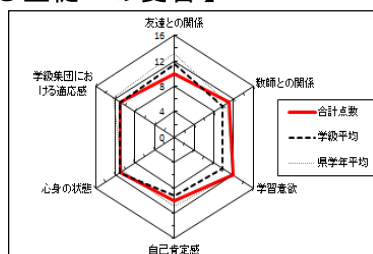


図19 2年時（11月）

表11 生徒Bの6観点の変容

区分	1年	変容	2年
友達との関係	11	↘	10
教師との関係	8	↗	11
学習意欲	12	→	12
自己肯定感	7	↗	10
心身の状態	10	↗	11
学級適応感	13	↘	11

ア 1年時（11月）の結果の分析

当初の生徒Bに対する担任の見立てとして、「友達との関係」、「学級集団における適応感」、「自己肯定感」が高いポイントを示すであろうと予測していた。しかし、結果は、図18のとおり、「友達との関係」、「学級集団における適応感」は、高いポイントを示していたが、特に「自己肯定感」が落ち込んでいる状況であった。生徒Bは、「自分は、みんなの役に立ててはいない。」と感じていたことが分かった。

イ 指導・援助の方針

「自己肯定感」を高めさせることを目的とした関わりをもつ。その中でも、特に、「みんなの役に立っている」という思いを感じさせるような働き掛けを行っていく。

ウ 具体的な働き掛け

学級の一員として、班活動を大切にし、責任をもって取り組ませるように支援した。班ノート（班内の交換日記のようなもの。他者の誹謗中傷は絶対に書いてはいけないという決まりがある。）に取り組ませ、他者（友達）を知る機会や他者（友達）に自分のことを知ってもらう機会を意図的に増やした。

エ 2年時（11月）の結果の分析

図19、表11のとおり、「教師との関係」、「自己肯定感」、「心身の状態」のポイントが上昇していた。他の観点も1年時よりは、下がっているものの、比較的高いポイントを維持していた。特に、「自己肯定感」は、3ポイント上昇しており、「自分は、みんなの役に立っている。」という生徒Bの実感が伺える。「教師との関係」も向上しており、教師との信頼関係も含め、班活動を通じた自己肯定感を高める支援が効果を発揮しているものと考えられる。

(4) 個への対応（生徒C：2年）

【生徒Cの概要（1年時の状況）】

生徒Cは、明朗快活で友達からの信頼が厚く、様々な集団の中でも中心的な存在であった。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Cの変容】

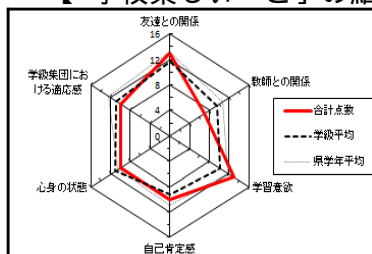


図20 1年時（11月）

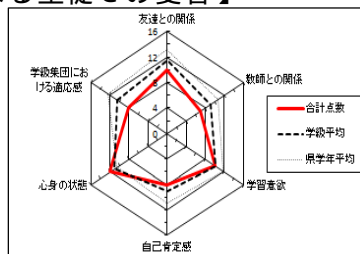


図21 2年時（11月）

表12 生徒Cの6観点の変容

区分	1年	変容	2年
友達との関係	13	↘	10
教師との関係	7	→	7
学習意欲	13	↘	10
自己肯定感	10	↘	8
心身の状態	10	↗	12
学級適応感	10	↘	8

ア 1年時(11月)の結果の分析

生徒Cは、図20のとおり、やや「教師との関係」の観点のポイントが低いものの、「友達との関係」や「学習意欲」も高く、他の観点も比較的、安定したポイントを示していた。実際、生徒Cの周囲にはいつも友達があり、充実した学校生活を送っているものと分析した。

イ 指導・援助の方針

集団におけるリーダー的立場を維持させながら指導を続けていく。

ウ 具体的な働き掛け

本人には、引き続き、生徒Cが良い意味での集団への影響力を発揮できるような関わりをもつようにする。

エ 2年時(11月)の結果の分析

図21、表12のとおり、6観点中4観点においてポイントが低くなっていた。生徒Cは、今年度、部活動のキャプテンに起用されたが、部活動内での人間関係のトラブルがこのような結果に顕著に表れているものとする。学級内にもトラブルとなっているチームメイトが在籍しているので、今後、教育相談の場を活用しながら、「友達との関係づくり」の改善を起点に、「自己肯定感」を高めていく働き掛けにつなげていく必要がある。

(5) 成果と課題

ア 成果

「学校楽しいーと」を実施し、ウィークポイントと捉えた観点に対して、具体的に「指導・援助の方針」を立てた。それに基づいて働き掛けを行った生徒に対して、各観点の変容を捉えることができ、その効果を確かめることができた。

「特に問題がない。」と捉えていた生徒への関わり方を見直す機会とすることができた。

イ 課題

「学校楽しいーと」を単に使用するだけでなく、丁寧に掘り下げて結果を分析し、その結果を日々の教育活動に生かしていく必要がある。

「学校楽しいーと」を活用した取組は、担任だけでなく、より多くの教職員で、情報を共有し、共通理解を図り、共通実践できるように議論をしていくことが大切である。

3 C 高等学校における実践例

今回、調査対象となる学年は、他の学年と比べ問題行動が多く、また、集合してから落ち着くまでにやや時間がかかる状況があり、学年職員会等を何度も開いて生徒への対応を検討してきた。そして、頭髪服装指導をはじめ違反する生徒に対して指導を徹底してきた。一時的に問題行動は減少したが、依然として変わらず、授業が成立しない状況も変わらなかった。そこで本年度は、対処的な生徒指導が中心であったことを改め、生徒の自己指導能力の育成を目指す積極的な生徒指導を行うことにした。具体的には、「学校楽しいーと」を5月に実施し、生徒に今の自分を振り返らせ、現在の状況を気付かせるようにした。学年会、教育相談係が中心となり結果の分析を行い、どのように対応するのか指導・援助の方針を立て生徒への働き掛けを行った。再度10月に「学校楽しいーと」を実施し、分析した。その結果等について次に述べる。

(1) 集団（学年）への対応

【「学校楽しいーと」の結果による集団（学年）の変容】

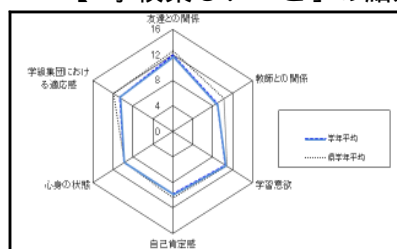


図22 5月の状況

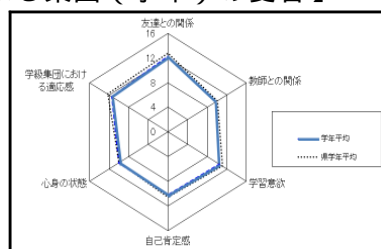


図23 10月の状況

表13 6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12.0	↗	12.2
教師との関係	8.8	↗	9.8
学習意欲	10.8	→	10.5
自己肯定感	9.8	↗	10.3
心身の状態	9.8	↗	10.0
学級適応感	10.7	↗	11.5

ア 5月の結果の分析

県の学年平均と比較して、「教師との関係」、「学級集団における適応感」の2観点について特に低い結果を示した（図22）。この学年は、落ち着きがなく、また集合に要する時間が長くなる生徒が多かったため、教師が静かにさせたり、頭髪服装を正したりと注意を繰り返してきたことが、「教師との関係」が低かった原因の一つと考えられる。また、学年職員室を生徒棟へ新設したことで、生徒が教師から、ずっと見られているという状況も「教師との関係」を低くした要因と思われる。これまで教師が、対処的な問題行動ばかりを注視し、生徒全体への対応が十分ではなかったと反省している。そのため生徒相互の関わりが薄くなり、学級において落ち着きがない状況が見られるように「学級集団における適応感」が低い結果になったと思われる。

イ 指導・援助の方針

改善するために、グループエンカウンター等を取り入れることを検討したが、LHRの時間は既に計画があり、また、学校行事等も多いため特別時間割を組むことも不可能であった。これまでの指導を見直し工夫改善できることはないか検討した。そこで、積極的に生徒の話を聞く機会を増やしたり、学年集会の進め方を教師からの一方的な注意や指導中心の方法から、生徒自身に考えさせる場をもつように変えたり、職場体験や販売体験、総合的な学習の時間において、教師が事前準備を説明し、個々で取り組ませていく方法から、グループを作り、その中で話し合いの場をもち、生徒に考えさせながら取り組ませて連帯感をもたせること等、行事の進め方を再検討することにした。

ウ 具体的な働き掛け

学年の教師が生徒のそばにいつもいることで、生徒を呼んで話をする機会を増やしたり、行動を共にしたり、生徒への声掛けや挨拶を積極的に行った。

頭髪服装指導をはじめ違反する生徒に対してその場での一方的な注意指導で終わらせず、自己決定の場を与えるため、反省用紙を渡して、保護者とともに家庭で考えさせるようにした。本人に今後改善していきたいことを書かせ、保護者には所見を記入してもらい、担任他、5名から話を行った。また、学年集会を毎月1回開き、教師講話を中心に実施し、教師の経験や生徒たちへの思い等を伝えた。

総合的な学習の時間の在り方を再検討し変更した。今までは、教師から個々に指示を出して、受動的に研究をさせていたが、今回からは、グループを作り、グループの中でテーマを考えさせ、内容等を検討させ調査研究をさせた。教師からの助言を必要最低限にとどめ、生徒自身で考える機会を増やした。学校行事の中で、責任感を育てるために、期限内に提出物を回収させたり、作品を完成させたりするなど個々に、具体的な役割を与えて、できるだけ生徒主体で取り組ませるようにした。

エ 10月の結果の分析

図23のように、6観点中5観点の平均値が改善された。特に、5月の結果で低かった「教師との関係」、「学級集団における適応感」の2観点について大きく改善が見受けられた（表13）。改善が見受けられなかった観点は「学習意欲」であった。今後、この指導を継続しつつ、学習意欲を高める指導を検討していかなければならない。

(2) 個への対応（生徒A：2年）

【生徒Aの概要】

生徒Aは非常におとなしい性格で周りに惑わされることもなく、問題行動等は全くない。学力面は低い傾向にあったが、部活動においては休まず努力を続け真剣に取り組んでいる。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Aの変容】

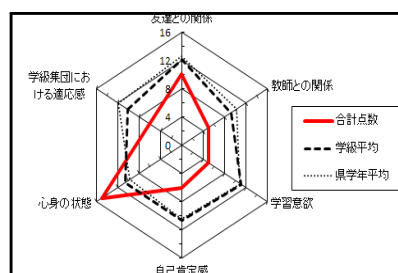


図24 5月の状況

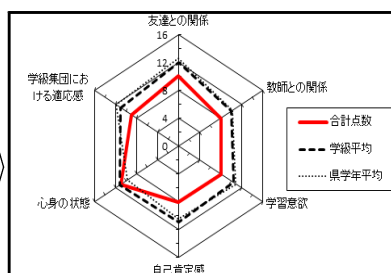


図25 10月の状況

表14 6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	10	→	10
教師との関係	5	↗	8
学習意欲	5	↗	8
自己肯定感	6	↗	8
心身の状態	15	↘	11
学級適応感	6	↗	9

ア 5月の結果の分析

普段の学校生活から、「学習意欲」が低い結果になることは予想できたが、「教師との関係」、「自己肯定感」が学級平均より大幅に低いポイントを示した（図24）。部活動においても、顧問の助言に素直に従い、高い目標に向かって取り組む姿勢ができていたとのことであったため、この結果のように、バランスの悪い結果になるとは予想できなかった。「教師との関係」が低いのは、日頃教師との関わりが希薄であると考えた。また「自己肯定感」が低いのは、学力に起因されるものと考えた。

イ 指導・援助の方針

毎日、必ず担任や他の教師が声掛けや話をするを指導目標とした。

ウ 具体的な働き掛け

朝の校門指導時から挨拶に付け加えて声掛けを実践した。
生徒の提出物を集める等、クラスの中で役割を積極的に与えるようにした。
数学に苦手意識があるため、夏休みに基礎的内容の特別補習を2週間程度実施した。

エ 10月の結果の分析

図25のように、バランスの良い結果となったことが示すように、学校生活において笑顔が絶えなくなり、積極的に生徒Aから教師へ話し掛けることが多くなった。また、数学の特別補習を実施したことで、計算問題に自信をもち、教科担任と十分な信頼関係を構築することができた。しかし、「心身の状態」の観点が5月時より低い結果となっており、特に、腹痛、頭痛など身体に影響が出ているようなので、無理をしている可能性もある。今後、声掛け等だけでなく、相談室等の環境をしっかりと整えた場所で話をする機会を設けることや、学校カウンセラー等も活用していきたい。

(3) 個への対応（生徒B：2年）

【生徒Bの概要】

生徒Bはクラスの中で誰よりも、学校行事等に積極的にに関わり、部活動も一生懸命に取り組んでいた。教師の指導に素直に応じ行動に移す姿勢が出来ており、問題行動は特に見られない生徒である。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Bの変容】

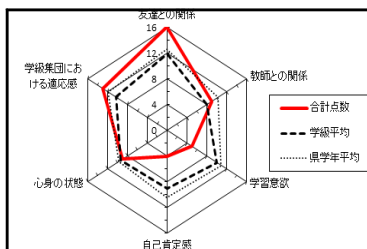


図26 5月の状況

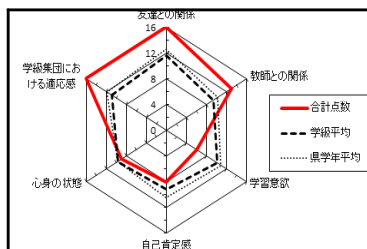


図27 10月の状況

表15 6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	16	→	16
教師との関係	9	↗	13
学習意欲	5	↗	6
自己肯定感	4	↗	8
心身の状態	9	→	9
学級適応感	13	↗	16

ア 5月の結果の分析

「学習意欲」「自己肯定感」が極めて低いポイントを示しており（図26）、成績の伸び悩みによるものと、活動的な性格であるが、クラスの中で本人の役割が明確でないところによるものと分析した。

イ 指導・援助の方針

学習に対する取組の改善や、進路指導を中心とした指導を展開することとした。

ウ 具体的な働き掛け

日々の学習時間を書き出させ、部活動と学習を両立させるための方法や苦手教科（数学）の勉強の方法、授業時の取組について、ノートの取り方や問題演習の仕方など具体的に指導をした。
 進路について具体的に考えさせたり調べさせたりして、今何に取り組むべきなのか明確にさせてから少しずつ実践をさせた。
 クラスマッチでキャプテンを務めさせるなど中心的な役割を与え、教師がクラスのまとめ方などを助言した。

エ 10月の結果の分析

図27のように、「自己肯定感」の観点は、大幅なポイントの向上が見受けられた。特に、自分の役割をしっかりとやり遂げたことが大きかったと考える。「学習意欲」の観点に関しては、2学期の定期考査前には友人にも教える場面が見られ、本人の成績は大幅に改善されており予想外の結果であった。教師の助言が以前より積極的に行われたことにより、「教師との関係」は大幅なポイントの向上に至った（表15）。バランスに偏りがあることが今後の指導の課題である。

(4) 個への対応（生徒C：2年）

【生徒Cの概要】

生徒Cはクラスの副委員長で、常にリーダーとして責任ある行動をとる。授業等は積極的にに関わり、成績は常に上位である。

【「学校楽しいーと」の結果による生徒Cの変容】

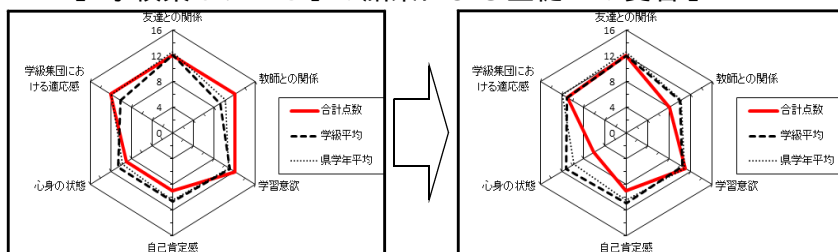


図28 5月の状況

図29 10月の状況

表16 6観点の変容

区分	5月	変容	10月
友達との関係	12	→	12
教師との関係	12	↙	8
学習意欲	12	↙	11
自己肯定感	9	→	9
心身の状態	9	↙	6
学級適応感	12	↙	11

ア 5月の結果の分析

普段の学校生活の様子から「教師との関係」「学習意欲」「学級への適応感」が高いポイントを示したことは予想されたが、「自己肯定感」については、見立てよりも低いポイントであった(図28)。

イ 指導・援助の方針

これまでどおり、リーダー的立場を維持させながら、学級活動に積極的に参加させる指導を続けていくこととした。

ウ 具体的な働き掛け

クラスの生徒の出欠確認や提出物の回収、連絡事項の生徒への周知徹底等、学級活動において中心的役割を担わせた。

エ 10月の結果の分析

図29のように、「教師との関係」、「心身の状態」の観点が低いポイントとなった。普段の学校生活の様子からは予想できない結果であった。担任や教科担任は、生徒Cに連絡事項の伝達や生徒の出欠確認等任せることが多く、その責任をしっかりと果たしていたので特に心配する生徒ではなく信頼関係を築けていると感じていた。このような結果(表16)になったのは、生徒Cの思いや悩みなどを聞く機会が不足していたことや、リーダー的立場としての責任の重さによるストレスが原因ではないかと考えた。まず、本人の話をしっかりと聞いて、Cの抱えているストレスを取り除くことを優先することにした。

(5) 成果と課題

ア 成果

生徒の状況を見ると、以前に比べ落ち着いて学校生活を送る様子や、自ら考え積極的に行動する姿勢が見られるようになった。

教師は、積極的に生徒との関わりをもつことに努め、個で生徒を指導するのではなく、学年集団として生徒の状況を共有する等連携しながら指導するようになってきた。

「学校楽しいーと」を2回(5月、10月)実施したことで、生徒の学校における適応感の変容をみながら取組の効果について検証し、次の課題を明確にすることができた。

「学校楽しいーと」の結果を基に日常の観察から見取ることができにくい生徒の意識を捉えることができ、働き掛けの方針を具体的に立てることができた。

個を大事にすることにより、集団も改善される結果となり、この「学校楽しいーと」は非常に有効であった。

イ 課題

教師の共通理解・共通実践を図るために、職員研修会を開催し、「学校楽しいーと」を活用する意義について理解を深めていく必要がある。

「学校楽しいーと」の調査結果を有効活用するためには、生徒指導部、教育相談係等と連携して企画、計画、分析、事後指導を推進できる組織作りが必要である。

教師によっては点数化されることにとらわれすぎる面もあった。

「学校楽しいーと」は、教師の指導の善し悪しを決定するものではなく、生徒が今何を思っで学校生活を過ごしているのか指導方法を見付ける手段として活用することが大事である。